惡業を造り苦を增長さすと云ふ風に、吾等は此惑業苦の巡行をやつて、愈々深い罪禍の淵に陷つて、再び浮ぶ瀨もなき有樣となつたのが吾等であります。況して、三世の因果から仔細に考へてみると、吾等は過去の過去際より、盡未來際迄、惑業苦の惡道を迚り、永劫の苦しき凡夫たるを免れないとすれば、實に憐むべき次第ではありませんか。

といつて、吾等は無暗と過去の罪業に泣いて、徒らに厭世悲觀に世を送るの必要は、斷じてありません。即ち過去の罪業の消滅をはかり、心鏡を清淨にせんが爲めに、懺悔滅罪の法が開かれてあります、此法は同時に戒を認得するの第一歩であります。

懺悔とは、懺は悔過と飜譯し、自己の罪禍を悔ひ改める事で、悔は漢字で、つまり梵語と漢語とを重用して、意を一層强めたものであります、換言すれば「吾等は今迄は、大罪を犯した凡夫であります、何卒、今迄の罪禍は一切御許し下さい、今後は誓つて再び一切の罪禍は犯しませぬ」と謝罪することなのであります、吾等は此懺悔に依つて全く再生するのであります、一切の罪禍を洗ひ流して、茲に淸淨にして無垢なる心鏡を體得するのであります。

心地觀經の一節に

慨愧の水を以て諸の塵勞を洗はば、身心共に淸淨の器となる

と御示しになつて居るが如く、實に身心の洗濯が出來るのであります。

昔、釋尊在世の當時、指鬘と云ふ恐ろしい外道が居ました、彼は百人の女を殺し、其女の指にて彼の鬘を飾らんと欲した、そして九十九人の女を殺した、けれども殘る一人の殺すべき女を見出すことが出來なんだ、自棄になつた彼は無慘にも彼の母を殺して百に滿たさんと決意したのである、釋尊は此事を聞かれて、こは捨て置く可きことではないとて、自ら單身、乞食の相をなして彼を訪はれたのであります、

佛「指鬘よ、汝は母を殺さんと決意したりと聞くが、何と云ふ淺間しきことをするのか、汝を生み、汝を育て、汝の今日あらしめたる其母を、殺して自分の虚榮の心をみたさんとする、汝は向後五百世の間、墮獄の苦に惱むであらう、余は愛憐の情を以て汝を救はずには居れぬ」

指「百の數に滿たぬ私は、母を殺さずには居られません」

佛「百に滿ちて夫れを何とする？人を殺すよりも重き罪禍は無いのに、況んや、大恩ある汝の母を殺さんとする汝は、其罪業に依り、汝の子々孫々までも殺さるゝ、世にも恐ろしき災禍に遭ふであらう、余は汝の今の行爲を涙なくして見て居るわけにはゆかぬ」

斯んな簡單な會話がかはされると、惡に強き彼は善にも強しとの諺の如く、忽然として悟つたのであります、見る〳〵彼の身は震ひ出した、そして今迄惡魔の形相の彼は、總ての恐ろしく飾られた鬘の指をふりおとして、柔和な相を現

はして釋尊の前にひざまづき、潛然として男泣きに泣き出した、漸やく涙を拂ひのけた彼は

指「佛よ、即今此座にて私は改心致します、そして私はあなたの弟子になり度いのであります、然し今迄、無量の罪業を累ねた私、とても佛弟子にもなれぬ事と存じます、唯一思ひに死なして下さいませ」

と昨日に變る今日の、やさしき彼の氣立、是れを御覽になつた釋尊は圓滿慈悲の金口より

佛「指鬘よ、汝の罪を慚愧の水を以て洗はゞ、汝の罪は霜露の如く忽ち消除するのである、そうして汝は、立派に佛弟子となることが出來るのだ」

と斯樣にして衆罪を許され、法衣をつくる身となつた彼は、一心專念に、佛の道にいそしむことゝなつたのであります、

或朝、彼は托鉢僧となつて、田舍の片道を獨りトボ〳〵と歩んで居た、彼を

見る者は、皆指鬘外道なるを知つて、戰慄して姿をかくす者ばかりであつた、彼は、是れ過去の罪障の報なりと諦めて、進んで行く途中、道の側に一人の女が居たのである、此女は彼を見て恐れを懷き身を震はしては居るものゝ、逃げて行く氣合も見えぬので、彼は不思議に思つて彼女の側に立寄つた、見れば彼女は妊婦であつて、今や陣痛の苦悶に黒汗を流して居るのであつた、此樣を見た彼は、彼女を救はんと百方手を盡したが、彼女は彼が過去の恐るべき者であることを知つてゐるのか、どうしても彼女は救に應ぜないのです、百計盡きて指鬘は、心寂しく自分の過去を悲しみつゝ、悄然として、釋尊の下に到り、救を求めんものと、祇園精舍に急いだのであります。

釋尊は指鬘の來るのを見給ひて、喜び迎へられた。

指　「佛よ、路傍に一婦あり、病難に惱んで居るのを見て捨て置き難く、種々と救ひの道をつくしましたが、彼女は一向に應じないのです、佛よ、希くは佛の御手によつて彼を救濟し給へ」

佛　「汝、再び行つて救へ」

指　「如何にして救ふべきでせうか」

佛　「予は生來、故意に生物を殺した覺えは無い、だから自分によつて救はれよ」

指　「佛よ、私は生來多くの生物を殺しました、そして今は懺悔に依つて善道に立ちかへりました、如何に私が過去に於て、罪障を犯した惡人であつたにしましても、今はどうしてそんな嘘が申されませう」

佛　「汝は多くの人を殺したであらう、然し夫れは過去の事だ、汝が覺えのない前生には、更らにより多くの恐ろしい罪を犯したかも知れない、けれども今は、生れ變つた人であり、新らしき人であり、佛弟子である、それ以來汝は罪を犯さぬであらう、されば殺さぬと言つたとて、何のさまたげも

ないではないか」

そこで指鬘は飜然反省する所がありました、そして急いで佛の下を辭して、救濟の使命を全ふしたとの事であります。

此話にて御分りになつたでありませうが、それだから吾等は、何も過去の罪過に泣いて居る必要はありませぬ、吾等は兎角、過去を捨てることの出來かねる弱蟲なのです、過去といふ重い荷物を背負つて居るから、身動きもならぬのです、其爲に不活潑にもなり、因循姑息にもなるのである、吾等は勤めて一刻も早く懺悔の道を辿り、新らしい天地に生きなければなりませぬ。

懺悔し盡し、心鏡清淨になつた吾等は、此處に佛の戒法を認得することが出來るのであります、そして戒法を守ることに依つて、人間は人間らしく、即ち商人は商人、百姓は百姓、學者は學者と各自の立場にたつて、忠君愛國、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和して夫々の本分を誤まらざる樣になる、是れ

を佛作佛業と申すのであります、

戒法の箇條は非常に澤山ありまして、三歸戒、三聚淨戒、五戒、十善戒、五十戒、百戒、二百五十戒、三百五十戒、五百戒と實に詳密なものでありますから、今は唯、戒法の箇條が澤山あると云ふことを御紹介して、此講を終ることと致しますが、要するに、七佛通戒の偈文にある樣に

諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛敎

といふことに歸するのであります。されば吾等は常に勤めて、此究竟の意を心に思ひ身に修せば、漸次、概念は自己の中心に徹して、立派な佛作佛行の體驗者となり得るのであります。

七　體驗の一路

二

定とは禪定の畧稱、禪は梵語で詳しくは禪那「ドフヤーナ」と申すのであつて、靜慮又は定の義であります、されば禪定と云ふ語もやはり梵漢の兼用であります、

禪定とは散亂せる吾等の心的狀態を統一し安靜にすることであります、心の水に一片の波浪を起さぬ樣になることであります、吾等は是に依つて、吾等の心性の本體を體驗し、宇宙の大眞理を徹證する眞實の佛智惠を體得するのであります、

唯識に「六窓一猿」の譬へがある、六窓とは眼耳鼻舌身意の六根を言ふのであつて、今日の所謂、五官に意識の依つて起る機官を加へた者であります、是

等の六根が色聲香味觸法の六境と相對して、其處に心意が働いた場合に知覺認識の作用を起すものであります、一猿とは吾等の心意を指したもので、此心猿が聲をきかんとしては、耳の窓に走り、色を見んとしては眼窓に行き、香を嗅がんとしては、鼻孔に走つて居ると云ふ有樣で、心猿は寸時も安靜、靜慮の閑もなく、外物に囚はれ、執着し、明け暮れ煩惱苦悶の爲に苦んで居ると云ふことを譬へた者であります、俗に「意馬心猿」などいふも此邊の消息を物語つて居る樣に思はれる、金剛經の一節に

若以色見我　以音聲求我　是人行邪道　不能見如來

とあるが、是れ意馬心猿の吾等心的狀態では到底、如來の本體に相見は不可能であるとの敎示であります、

實際、吾等の平常日用事に於てすら、ウキ〳〵した、上ずりの意馬心猿狀態で果して何事が出來ませう、是れ吾等が日常經驗する所であります、其れ故、

吾等は禪定に依つて靜思熟慮を要するのである、即ち先づ吾等の六窓を堅く密閉して、心猿の出所を防ぎ、心境を漸次に靜寂湛然たるものにせんと、勤むるのであります、これが次第に圓熟して參りますと、今迄の千波萬浪の如く、外面より、或は內面より寄せては返し、返しては寄する無數の思想感覺、憶念など云ふ心理現象が屏息して、唯胸中は廓然として、清淨なるを覺えるのみである、此場合、何等の分裂も、智解も、臆度も、計畫も、企圖も、情慾もなく、遂に萬物の原泉を盡し、天地の根元に突入するのであります、

是れ、禪定の眞唯中で又法悅の焦點とも申すことが出來ます、斯樣に吾等の心水が湛然として、一點の風波も起さない樣になつた時、或は心境の塵が拂ひ盡された時、丁度、華嚴經の一節にある如く

菩薩淸涼月　遊於畢竟空　衆生心水淨　菩提影現中

と示されてある樣に、吾等の心水に菩提の影、眞如の月、佛の相が皎然と映ずるのであります、

是れ禪定で必然的結果狀態でありまして、佛を一意專念に念ずるも、或は神に默禱するのも、坐禪觀法するのも皆一度は必ず此心的狀態に、達せんが爲めであります、

是れ實に佛祖各宗を通じて、實踐修行上の重要事でありまして、若し此禪定なくんば、佛敎は總て理論に陷つて、哲學や心理學や、倫理學の研究となつて仕舞ふではないかと思ひます、

今、私が斯樣な事を申しますと、淨土敎の如き宗派にありては、反對せられる場合があるかも存じませんが、淨土敎に於ても、念佛三昧といふ事があります、是れは彌陀を一心に賴み參らせて居る間に、何時の間にか念佛は身に泌み込んで、如來を體驗するのである、私は惡人であり、はつきりしない輩であり、法義を喜ばれぬ、疑深き凡夫である等の沙汰は悉く盡きて唯、如來が救ふて

やるぞよとの御聲が身に胸にしみこむばかりであるといつて居りますが、是れ念佛に依つて心水混然たるものとなり、遂に其處に如來の眞相を印したからではあるまいか、法華三昧の如きも同樣に、法華唱題の其間にいつしか、禪定に入りて、大自覺を得るに至る可く其他天臺の止觀等皆同一の理を語るものだと思ひます、唯、禪宗が座禪にて、入らんとするのと其形式を異にして居るのみであります。

禪宗では、禪定に入るのを、主眼として居りますが、是が爲に座禪をやるのであります、

即ち心水を湛然たらしめんが爲に、先づ戒法を保持して、可成心猿の散亂を防ぎ、次で座禪の形をとつて端座します、是等の形式に就ては、座禪儀に出て居りますから、重要な一節を紹介して説明に代へます。

「坐禪セント欲スル時ハ、閑靜ノ處ニ於テ、厚ク坐物ヲ敷キ、寬ク衣帶ヲ

擊ゲ、威儀ヲシテ齊整ナラシム、然ル後結跏趺坐シ、先ヅ右ノ足ヲ以テ左ノ脛ノ上ニ安ジ、左ノ足ヲ以テ右ノ脛ノ上ニ安ゼヨ、或ハ半跏趺坐モ亦可ナリ、次ギニ、右ノ手ヲ以テ左ノ足ノ上ニ安ジ、左ノ掌ヲ以テ右ノ掌ノ上ニ安ジ、兩手ノ大拇指ノ面ヲ以テ相柱ス、徐々トシテ身ヲ擧ゲ、前後左右、反覆搖扼シテ乃チ身ヲ正フシテ端座セヨ、左ニ傾キ右ニ側チ、前ニ躬リ、後ニ仰グコトヲ得ザレ、腰脊、頭頂、骨節ヲシテ相柱ヘ、狀チ浮屠ノ如クナラシメヨ、又身ヲ聳ツル太ダ過ギテ、人ヲシテ氣息ニ安カラザラシムルヲ得ザレ、耳ト肩ト對シ、鼻ト臍ト相對シ、舌、上ノ腭ヲ柱ヘ、唇口齒相著ク、目ハ須ク微カニ開キ昏睡ヲ致スコトヲ免ル可シ、若シ禪定ヲ得レバ、ソノ力最モ勝ル、身相既ニ定マリ、氣息既ニ調ヒ、然ルノチ臍腹ヲ寬放シ、一切善惡都テ思慮スル勿レ、念起ラバ即チ覺セヨ、之ヲ覺スレバ、即チ失ス、久々ニ、緣ヲ忘ズレバ自ラ一片トナル、此レ坐禪ノ要術ナ

リ」

尙此外、下腹即ち臍輪、氣海、丹田、（臍より凡そ三寸下の所を云ふ）の間に力を充分に加へて、禪宗の公案に向つて、坦々として工夫三昧ならば、身心の發展、並行して次第に進み、純熟して遂に禪定の秘奥に透入するのであります、

恰も日常、我等が接して居る光線には、何氣なしに居るが、若し是れをレンズを以つて焦點に集むる時は、高度の熱を發して事物を燒くに至るが如く、吾等が散亂せる、心意を統一して、禪定といふ焦點に集むる時、其處には絶大不思議の力、乃ち智惠を生むのであります、慧とは智惠の略であつて、佛智惠の事であります、是れ「定より慧を生ず」と云ふ所以であります、即ち定は脚であり、慧は眼でありまして、定の練磨をやるのは畢竟此慧眼を生まんが爲であります、

此智惠は吾等が普通に云ふ智惠とは、其趣を異にして居まして、科學的智識とか、哲學的智識或は常識などは、吾等の有限なる經驗や推理の力を以て、現象界の事相を相對的に知解し、分別し或は認識するものでありますが、獨り此佛智惠は超經驗的靈覺或は純粹經驗、又は直覺とも云ふ可き不可思議の力に依つて、體驗する所の智識であつて、實地の境地に透入せずんば、其眞味を捕捉することを得ないのであります、是れ佛心が、忽然として心水に印寫するの時であつて、吾等は此佛智惠によつて、實に無限絶對に瞑合し、宇宙人生の根源を體得し、生死去來の相の中にあつて、而も生死に染まず、怒りもする、泣きもするが、而も斷常有無の見に囚はるゝことなく、順行逆行の境に處して無礙自在である、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、淨に入り凡に入り、聖に入り、餓鬼畜生に入つて毫末も我を縛するものなく、隨所に主となつて、更に嫌ふ底の法もない、實に「衣を思へば羅綺千重、食を思へば百味具

足する」といつた樣な、大安樂境地に立つことが出來るのであります、遺敎經中に次の樣なことが出て居ます、

實智惠は則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり、亦是れ無明黑暗の大明燈なり、一切病者の良藥なり、煩惱の樹を伐るの利斧なり」と、

要するに、吾等は戒、定、彗の三學に依つて、諸行無常、諸法無我の理を體得し、更に之に依つて、涅槃寂靜の境地に透入して佛敎の目的を達し、究竟の理想たる佛陀を體驗するのであります、

八　佛陀の光明

然らば佛陀とは如何なる方であるか、佛陀は畧稱して一般に我國では佛と稱して居ります、支那で佛者を浮屠家と言ふたのが、轉じて我國でホトケと讀んだのであるとも申します、又、佛とはホドクの義で、煩惱妄想の網に縛られ悶えて居る吾等の心が、左樣な繫縛から脫して心地淸朗、一點煩悶の曇りもない澄み切つた心持になるの義であると申します、

佛陀は菩提を覺證せる等正覺者、即ち涅槃を證得せる究竟解脫なりと申しまして、菩提即ち覺りを覺證し大安樂の境地に立つた方であると云ふ事は、既に御承知になつた事と存じますが、今少しく佛身の內容を說明して置く必要があります、

佛の身は是を三身に分つことが出來る、印ち法身、報身、應身であります、

法身とは宇宙本來の大靈力、若くは眞理を云ふのであつて、宇宙一切の萬象は悉く眞理の表顯なれば、山の聳ゆるも、鳥の飛ぶも、獸の走るも皆是れ法身の相であります、釋尊が初めて眞理を體驗せらるゝや、「草木國土、悉皆成佛」と叫ばれしも此處に基因するものだと信じます、

宇宙の大靈力を體驗し、佛陀の果を得んが爲には、如何なる苦勞困難をも辭せず、一身皆擧げて衆生濟度に盡すといふ最大修行が原因となりて、やがて最上の報をうけて法界に通達無礙の絶對智惠となるのである、是を報身佛と名けます、四十八の大願を果さんとして、無限の長日月に渉つて修行を積まれ終に極樂淨土を建設せられたと云ふ、阿彌陀如來の如きは、報身佛の一例であります、

應身とは吾等凡夫の機根に應じて、種々と姿を變じて御慈悲の光を以つて、救ひ給ふ御身を言ふのであります、

今是を一家の主人の例を以つて說明せば、一家の主人の本心本性が法身で、主人たるの智德を具備して、主人らしき衣服を着け、上席に座して居るのが報身で、百性なら手に鋤をさげ、商人なら算盤を持つて、種々と其場に應じて働き、妻子眷族を惠み且つ養つて行くのが應身であります、釋尊が生れ給ふや、周行七步「天上天下唯我獨尊」と言はれたのは法身で、山に上り難行苦行の後、大悟して正覺の位につき給ひし時が報身で、衆生敎化の爲に、種々と橫說竪說と御說法下さつたのが應身佛であります、今私は佛身を三身に分けて見ましたが、三身と申すも畢竟一身の三方面の表れで、一體は三身に分れ、三身は又一體に歸するのであります、凡ての事物でもよく氣をつけて、觀察すると體相用に區別する事が出來ます、譬へだ石は石といふ本體があり、白い石、黑い石とか云ふ風に、石の相があり、又其石が、土藏の敷石となつたり、庭園の飾り石となつたりするもので、之れが即ち石の用であります、（用とは其のはたら

きを云ふ）佛身に三身の御分身があるのは、何も不思議はありません、
佛は斯様な大なる、尊き、有り難き眞理を體驗なされ、深き尊き修行の德を積み、一切衆生の迷ふ者を救はずば措かずと、御誓願を立てられて、日夜我等を御救ひ下さる尊い御方であります、
此處に御注意申して置きたいのは、よく世間の人達が佛と云へば、釋迦如來もあり、彌陀如來もあり、藥師如來もあり、大日如來と云ふ樣に三千佛も御出になるときいて居ますが、何故、斯樣に澤山の佛があるか、又如何な利益を與へなさる者であるかと問ふものがあります、
是は世界の萬有は永劫不變で、絶對渾一の實在體、即ち佛、又は眞理の變現であつて、此佛樣の體が變じ、或は制限され、又は一部分が現れて、世界となり萬象となつて居るのであります、故に私共が宇宙萬象を見るとき別々の者が集つて居る樣に見るけれども、其實は全なる一の佛樣の一分の現れでありま

す、同時に多くの佛樣方も、やはり佛樣の分身であつて、古歌に「釋迦阿彌陀、地藏大日と名はあれど同じ心の佛にぞある」とあり又眞宗の御文には、「諸佛と申すは彌陀如來の分身なれば、十方諸佛の爲には、本佛なるが故に、阿彌陀一佛に歸し奉れば、即ち諸佛菩薩に歸する謂れにして、阿彌陀一佛の中に諸佛は盡くこもれるなり」とあるを見れば、畢竟名を異にする諸佛も皆佛陀の分身であります、だから自分達は此佛を深く信じまつり、一念に歸依し奉らば、いつの間にか吾等も亦同樣佛身となり得るのであります。

九　慈悲の體驗

華嚴經に「佛身は法界に充滿して、普く一切群生の前に現じ、緣に隨ひ感に赴いて遍からずと云ふことなし、而も恒に此菩薩座に處し玉ふ」とある通り、佛は常に生物の世界へでも無生物の世界へでも、自分の身を現はして、物に應じ事に觸れて大慈悲を垂れ玉ふのでありまして、吾等にとつて實に有り難いことであります、唯悲しむ可きは佛の悲慈のあまりに廣大であるに反して、吾等の信念の薄きが爲に、折角の御慈悲をうけ入れることの出來ないのは殘念な事と申さねばなりません。丁度、國王や親の慈悲のあまりに廣大であるが爲に、赤子がそれを實際にうけながら、其有り難さを感得しないと同樣ではないかと思ふ、今少しく慈悲と云ふことの說明をしておきませう。

慈悲といふのは梵語で、慈は父の愛、悲は母の愛をいふのである。キリスト教では、慈悲を博愛といひ、儒教では仁、ソクラテスはこれを德といふた。その言葉は異るけれども、意味は同一であります、更にこれをひらたい言葉で申せば「思ひやり」或は「我身をつめりて人の痛さを知れ」といふことであります、

一般の人は慈悲とはたゞ單にものを愛撫することばかりと思ふやうであるが、慈悲の性質はそんなせまいものではないので、與ふ可き時には與へ、奪ふべき時には奪ふ、生かすも殺すも、共に時に應じて慈悲の行ひとなるのであります、これを言ひかへてみれば、老婆が子弟を敎育する樣に、徒らに愛情に溺れて子供を害なふ如きは慈悲の性質を誤解したものなのであります。

諺に「老婆の育てた子は三割下る」とか「乞食を三日すれば止まぬ」といふやうなのは、老婆が子供の愛に溺れ、また世人が慈悲の性質を誤り、乞食をして恩に狎れしめるからである、これに反して「可愛い子には旅をさせ」とか、

「艱難は汝を玉にす」といふようなのは、徒らに目の前の愛に溺れず永久の愛即ち眞に正しい慈悲の心から出る言葉であります、

人として誰か我が子を可愛いからぬものがあらうか、そしてまたその子が、自分の膝下をはなれるのを喜ぶものがありませうか、けれども、眞に我が子を思ふ親は時には涙を隱して我が子の艱難を默認しなければならない、昔から高僧や、聖人君子が、常に子弟のためには涙を揮つて鞭韃したのも、これが爲であります、「嚴師好子弟を出す」とは金言ではないか、慈悲の性質は一面にはかやうに峻嚴であります、

凡そ地球上に存在する生物を見るに一物として、因緣によつて生ぜざるものはない、例へば花が開くのも、葉が落ちるのも、芽が生へるのも、すべて土と水と火と風の四大元素の和合と分離の法則に因るものであります、

私共御互の身體も此四大元素の和合に因つて生じ、死んでまたこの四大元素に歸る――すべてのものは皆然りである、この四大元素は一體何處から來たか、分離して何處に去るか、或は花ともならう、草ともならう、思ふて此處に至りますれば何物もすべて關聯せざるものはないのでありまして、實に彼の行基菩薩の

ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲聞けば
父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ。

と詠まれたのも、この萬物相關の理を語るものであります、人一度此理を思ふたなら、どうしてたゞ親族知友に及ぼす慈悲を以つて滿足が出來ませう、更に同敎信者或は人類相互の慈悲を以つて、滿足することが出來ませう、吾等は更に進んで生物にも無生物にも慈悲を行はずには居れないではありませんか。

凡そ世に出現して居る萬物、何物といへども、皆一日なりとも世に現存して世のため人のためにならうとする盲目的の目的を以つて居るのであるが故に、

この目的を遂行せしめるのが人の勤めではありませぬか、

若しも人に慈悲の念がなく萬物を育てるの念がないならば、萬物はおそらくその目的を達することが出來ないであらう。例へば一枚の着物も、みな人のために奉公しようと云ふ目的を有つて居るものを、人が無慈悲にもその着物を無駄に使用したならば着物は忽ちに使用にたえなくなつてしまふのでありませう。されば慈悲の念は不偏不黨以て萬物に向つて垂れ與ふの念でなければなりませぬ、

そうして廣大なる無縁無邊の慈悲を行ふには、吾人はまづ小我をすてゝ佛を信じ佛の大慈悲を感得して、之れを行ふといふことを忘れてはならぬのです。無我といふ言葉はよく何かにつけ使はれてゐる語ですが、これは決して茫然自失或は沒我の意ではなく、眞我若しくは實我のことである、言ひ換ふれば、天地の心を以つて我が心とし、天地の大道を以つて我が道とすることであります。

私共が世に處して人を怨み、或は憎む所以は、小さい我を愛し、我に偏する の念に勝り、所謂我利または利己の念を先に生ずるためである、それを若し常に佛祖の行持し至ふ如く慾を離れ、利己心を脱し、義におもむき、道に殉する の念があるならば決して怨恨の念の生ずることなく、かへつて自分を忘れ己をすてゝ、他人を敎ふの念を生ずるに至り、更に進んでは一切の有情類にもこの念を推し及ぼさんと勤める樣になるのであります、この念がとりもなほさず無縁無邊の大慈悲ではありませぬか、

この無縁無邊の大慈悲こそ、佛の常に行爲し玉ふ處でありまして、故に經にも「佛心とは大慈悲心是れなり」とあるのも首肯かれる事ではありませんか。

一〇　共存共榮

私が今、此處に生存して居るは、私が私で孤立して存在してる樣にも思はれる、それだから人々がよく「私は私で生きて居ます、大きに御心配」など皮肉ることがあります、成程、一寸考へてみると、自分の存在は自分でやつてる樣に思はれるが、實は然らずであります、吾等の存在は實に一切の者と相關聯して初めて存在して居ることが出來ると云ふことを忘れてはならぬ、譬へば、此處に私が生存するのは、私の父母があつたからです。父母は又、父母の各の兩親、四人があつたからであります、斯樣に考へを進めて見ますと、縱には祖先の又大祖先迄聯關し、橫に擴げては一切の人類、更に生物、無生物にまで聯關しなければ、私一已の存在さへも出來ないのであります、即ち人類は勿論、食物も、衣服も、空氣も、水も、家屋も、大地もそれぞれ私と聯關してるのでありまして、彼等と同樣に、彼等は彼等でそれぞれ關聯してゐます、今試みに私が此處に一手を擧げるとせんに、それは唯單に擧げたばかりでなく、同時に空氣に反抗します、又空氣も排斥します、排斥せられた空氣は他の空氣に順次關聯するでせう、そして空氣が排斥せられた所は空虛になりますから、此の空虛を滿すために、他の空氣が動き出し、從つて又他の空氣も動搖を初めます、そして空氣が動きますのは總べて引力の影響する者とすれば、地球は太陽に、太陽は又太陽系の諸星に影響するとせねばなりません、かくて宇宙全體に關聯するのは當然であると思はれます、そこで吾が佛敎の人生觀では私達の生存は、唯此の一生だけのことでない、前にも後にも續きがあります、即ち道德上の因果の續き、それから業因業果の繼續があると見るのであります、それと同時に、一個人の生存は、單に個人だけで成立してる者ではなくて、常に他の人々や他の生物、無生物と相聯關して居る、即ち衆生は孤立しないで、其生存は

總て互に關係しつゝあるのだと云ふことが、中心思想となつて居ます、

斯樣に考へてみますと、畢竟、私一個人が此處に存在してることが出來るのは、時間的には無限の過去から、無限の未來に關係があり、空間的には、宇宙一切の現象と不離の關係がある御かげであると申して差支ありません、勿論、直接、間接、親疎の差はありますが、それは此場合、論ずることを省畧するにしても、若し私一人が惡人になつて社會で惡事を働く樣になつたとすれば、其れは直に他の人々に惡の影響を及ぼす樣になるのは勿論、ひいては、社會、國家、萬物にまで惡影響を及ぼす樣になります、之に反して私が善人となつたならば、其ため、其れだけ社會が善良なる影響を受けるのは當然であります、又反對に社會その者が惡くなつたならば、其中に居て私がいくら善人であると思つてゐても、何時の間にか惡影響を蒙つて居るのは又自然であります、だから自分をよくすることに依つて、社會をよくし、社會をよくすることに依つて自分をよくすることが出來るのは必然的歸結であります、人間はへんな者で、いくら善人だと申しても心の底に全く惡の意がないとは限りません、又、如何に惡人だといつても、彼に善の意が幾分でもないとも限りません、だから自分達は常に奮勵努力して自分の向上を計らなくてはなりません。

佛敎で「與同罪」と云ふことを申します、是れは吾等が社會に存在して居る限りは、社會と其の罪を與にせねばならぬと云ふ意味でありまして、譬へば、社會に一人にても惡人が出來たなれば、其れは惡人になつた其人だけの罪ではなくして、社會全體の罪であります、だから社會は全責任を負ふて改善に努めなければなりません、又は假りに社會全體が濁つて仕舞つて、唯自分一人、澄んで居るとした場合には、其れは其の殘つた一人の罪であつて、其人は其の罪を雙肩に荷つて社會全體の改善を努めなければならぬのであります、此場合、それは思はぬ怖ろしき迫害や嘲罵叱責に遭遇するのでありませうが、決して躊

躇してはなりません、飽くまでも奮然として邁進しなければならぬと申すのであります、私はこの事が人間が何故に生存するかに對する道德上の意味だと思ひます、そして若し私達が此の思想を持たなかつたならば、人は自然に自利主義、獨善主義に陷つて屈原の樣に河中に投じて死なねばならぬ破目になると思ひます、

以上は唯一個人を基本として他に及ぼす關係、若しくは相關の理を申したのでありますが、更に一歩を進めて宇宙と云ふ本體の立場からも考へて置かねばなりません、自分と宇宙の現象とは不離の關係があることは既に申しましたが、さて自分にしても、他人にしても、何處から生れ出たかと云ふに、大きく考へて見ますれば、一人として宇宙の中から生れ出ない者はありません、そして宇宙を離れることも出來ず、宇宙の中の一存在物として現はれて居るのであります、更に人類ばかりでなく生物、無生物、天地萬物、悉く此宇宙から生れ、宇

宙の中に存在せぬ者はありません、故に假りに今、宇宙を親としますれば、人類は勿論、他の生物も、無生物も、一切が皆、宇宙に對しては子供であると見ることが出來ます、是れ釋尊が「一切衆生、悉く同胞」といつてる所以であります、して見ると吾等人類は實に四海同胞、萬人兄弟でありまして、互に持ちつ、持たれつして相援け合ひ、相愛し合つて宇宙に對する孝行の本義を全ふせねばなりません、然し此處に申し添へたいのは、兄弟だとか、姉妹だとかいつても、何んだか平常の自分に考が及んで、相が離れて居り、そして何んだか未だ疎遠といふ氣持がある樣な氣が致します、然し其れは私達が相を離して居るとそう感ずるのであります、即ち私達の我見が然らしむるのであります、若しよく四海同胞の眞相に體達して見ると、我も人なり、我も人なり、即ち人と云ふ上よりみれば同一であり、猫も犬も蚤も虱も吾も動物と云ふ上から見れば同一であります、そして更に是れを生物と云ふ上から見ると、草も木も動物

も同一であります、若し物といふ點から見ますれば、生物も無生物も一切同一根でない者はありません、譬へば茶碗は土で造つてあります、私達は米を食つて生て居るのであります、米は土を食つて居ます、されば米は土の子であつて私達は土の孫であります、そして茶碗は土の子でありますから、遠い昔は共に石や土の仲間であつたと云ふてもよいと思ひます、

斯樣に云ふも實は是れは淺薄な說明に過ぎないのでありまして、彼の釋尊は刻苦修行の曉、忽然と「天地同根、萬物一體」の理を體驗せられたのでありまして、眞實の境涯は釋尊の悟界に入つて見なければならぬと思ひます、即ち自ら天地を以て自分とし、萬物を持つて自分の手脚の如く達觀せられた釋尊が「一切衆生、皆是吾子」と叫ばれましたのは此處に基因して居るのでありまして、此の源泉から、あの高潔な、廣大な純無垢の無我愛が生れて居ることを忘れてはなりません、

世の中を御覽なさい、朝夕の鬪爭、嘲笑、罵詈、甚だしきは殺人罪までやる同胞が出かけることは珍らしくない樣ですが、一體那邊に其の理が存在してゐるでせうか、

是れ私達が「天地同根、萬物一體」の眞理に體達せず、徒らに千差萬別の相にのみ執着して、取捨憎愛、我他彼此の我見のみを增長し、平等の眞義を忘れ、差別の見にのみ囚はれたからであります、

一度、此處に思をはせ、平素の本義に體達して無我の大愛に住したならば、天下を以て自分とし、衆生の苦惱は我が苦惱、衆生の樂は我が樂とする仁人が現れることだと思ひます、實に現代最も願はしいことの限りであります。

されば吾等佛敎を信ずる者は常に

衆生は無邊なり、願くば度せんと誓ふ
煩惱は無盡なり、願くば斷ぜんと誓ふ

法門は無量なり、願くば學ばんと誓ふ
佛道は無上なり、願くば成ぜんと誓ふ。
と四句の誓願に鞭つて共に共に佛の道にいそしみ、自利自他、自覺覺他、覺行圓滿せんことを願ふ可きであります。

一一　孤峰頂上に立ちて

脇目もふらず一息に上りつめた私は、今孤峯頂上に立つて居る、上りたい上りたいとの希望から專念に上りつめはした者の呼吸がはずんで眩暈を感ずる、漸く眼を放てば、下は見るも怖しい險崖の底深く谿がある、上には無數の星が燦爛として光つて居る、上らんとすれば天上だ、下らんとすれば斷崖絶壁だ、いづれにしても一歩も身動きのならぬ私だ、生か將た死か？　頂上に立つてる私は二本の脚に血が通つて居る間だけの生命だ、一寸でも此脚が搖いだら、それが最後で生命の縄は切れる。

□

生か死か、天上か地下か、斯んな悶えをして居る間に時は刻々と刻まれて大晦日の夕方が來た、

梧桐の葉が黄くあせて、もろくも一枚一枚と落ちて今は骸骨ばかりの樹が並んで立つて居る、烏の群に急ぎつゝ鳴く悲しい聲が山寺の昏鐘と共に私の耳を襲ふて來る、孤峯頂上に立つた私は人生の寂寞さが身に泌みて、丁度枯野に群を失つた小牛の樣に獨りトボ〳〵と生命の歩みつゞけて居る樣に思はれる。

□

厭世の念が心内に滿ちたからとて今更何處に行くのだ、現世をすてゝ未來の國が何處にある、弘法大師曰く「佛法非遙心中即近、眞如非外棄身何求」と即ちこゝである、幾ら考へても未來の國らしい者をまだ見ぬ。若しもあつたとすれば、それはせめて幻影の樣になりと現はれてくれる筈だ、無いとすれば此頂上から足をゆるがせるのは草葉におく露となつて仕舞ふだけで無意味だ、やつぱり此處に嚙りついてゞも生命の續く限りは續けて見やう。

□

死とは何だ、そして死の世界が私達をどんなに待遇すかゞ問題だ、成程、心臟の運動が止まり、同時に脈搏が絶える時が死の時だとも言ひ得る、然しそれは私の肉體の上の事だ、私といふ主人公、それはどうなるのだ、主人公はどんな待遇を未來でうけるのか、やつぱり解らぬ、涙は頰をつたはつて流れる、夕方の寒い風が颯と吹いて地上の朽葉を搖るがす時、現世の悲哀を歌ふ自然の妙曲が響いて來る、死は依然として闇い謎だ。

□

弱い狹い而もかたまらぬ胸は日に悶えるばかりだ、そして遂には痛みさへ覺える樣になつた、孤峯の頂上にある私は、心神に悶え肉體に苦痛を覺える悲慘の身となつた、丁度絶海孤島に船を失つて唯獨り本國の空を望んで泣いてる身となつた、今更後悔しても詮はないが、それでも愚痴をこぼしたくなる、何故に斯んな頂上を望んだのだ、何故、もとの平野に悠然と立つて南山の雲の來往

でも見て滿足しなかつたか、といつて今更とりかへしのつかぬ。否人生は煩悶の旅だ、病氣の旅行だと思ひ返しても見た、依然としてやつぱり不安だ、生きんとして生きられず、死せんとして死なれぬこの刹那は眞に人生悲慘の極だ、斯んな時に宗教の力が何の役に立つのか。

□

私の過去は勇敢な人生であつた、希望に滿ちた旅行であつた、今は此暗い慘たる人生に引き擦られて何時まで行くのだ、噫！

九時の鐘が何處からとなく響く、犬が遠吠えして居る、其は今日一日の疲勞を憩ふべき自然界の報告である、然し斯んな悶えをもつた私には憩ふべき報告ではなくて一層煩悶を強ゆる寂しい者であつた。

□

頂上に立つた私は他人の身の上をも考へて見た、彼等も矢張り私と同樣に生の執着に苦悶して居る、物質上の苦悶もある、精神上の苦悶もあらう、彼等が人生を送つてる以上、彼等も同樣に苦悶を脱れるわけにはゆかぬ、生と苦とは夫婦關係がある樣だ、苦の裏面には生がある、生の表には苦がある、苦はすてたいが生には執着したい。あまり勝手な慾だとも思ふ、苦が生のつき者だからといつて夫婦の樣にしてつれて歩みたくもない、此處に他人達も悶えて居る樣に思はれる、それでは生と苦を二つすてゝはとも思ふ、然しそれでは死あるのみだ、死が私には謎なのだ、地人も同樣だ。

□

宗教は教へて居る、生死を超越する所に安必が得られると、又曰ふ「生死の心を除け」と、又曰ふ「生死を脱得すれば去所を知る」と、いづれにしても生と死とを除くことだ、平たく言へば生死を氣にかけぬことだ、生と死が氣にからぬ樣になつたら、それは永遠の生命なのだ、其處に新しい王國が生れて來

るのだ、けれども是は容易の業でない、だから宗教が道楽半分、遊戯半分でやれないのは當然だ、どうしても眞劍味のある努力が一番肝要だ。

□

頂上で行き詰つてる私がいくら眞劍になつた努力して見ても、それは墜落して谿底の白骨になるだけでないかと思ふと努力の仕様がない、此處には手段も方便もない、もう絶對絶命だ、もう斯うなれば身をすてゝこそ浮ぶ瀬もあれと古人も言ふ、斯んな場合に生ぬるい人間の猿智惠が何程の力があらう、小悧巧で上辷りで其場凌ぎの人達がなすべき手段は全く盡きたのだ、丁度冬枯れの木が大に死んで骨ばかりになつた盞春に又新しい芽をふき出す樣に、大に躍り出て、死に切るより外に施す術もない、嶮崖に手を撤して絶後に蘇生せよとは此事だ。

□

生ぬない、信じた樣な信じない樣な、疑つた樣な、疑はない樣な宗教が私にとつて何の響く所があるものか、信ずるなら首をかけて信じやう。疑ふなら命を堵して疑つて見やう。此處に私達が眞實宗教を求むる態度がある。疑ふに疑はれず、信ぜんとして信ぜられない輩は未だ孤峯頂上に上らぬからだ、皆一息に上つて見るがよい、そして苦しく悶えて居る私の友となつてほしい。

□

一歩の足ゆるぎのならぬ私は悶えの胸から次の記憶が湧いた。釋尊が未だ太子で修業中、何處からとなく「諸行無常、是生滅法」と響いた、太子は思ふ、此事は自分が既に昔悟つた事だ、その先がきゝたいとて聲のあつた方に急がれた、そこには恐ろしい羅刹鬼が居た、太子は希望を歎願した、鬼はいふ、今や空腹にて聲を出す力がない、汝が肉を我に與へよ、さらばきかせんと、太子は喜んで應じた、そして身を躍らして羅刹の口に飛びこんだ時、羅刹の齒は蓮花

と化して「生滅々己、寂滅爲樂」と響いた、そして太子は悟り得たと、こんな事が浮んだ時、私は頂上から躍り出さうと決意した。

□

決意した私は一念に絶大の佛よと叫んだ、そして私は私の全體を佛に投げ出した、其處は闇い深坑の樣であつた、あたりは全く見えぬ、見聞覺知一として働く世界ではなかつた、全く死の世界であつて日頃愛着して居た私自身さへも見付からない、勿論語るべき友も慕ふべき財貨もない、誇るべき勳等もない。

□

何の位長い時間を經たかは知らぬが丁度元旦の朝の樣に何處からとなく曉鐘が耳に這入つて來る、鷄が歌ふ、御宮の太鼓が響く、無數の星がまだ光つて居る、全く過去のない新生の世界が出て來た、何を見ても何をきいても盤の上に

珠をころばす樣に凝滯がない、悶えがない、唯尊い佛の光が滿ち〳〵て居るのが見られる、自分迄が光明を發して居る樣に思はれる、唯心の淨土、己身の彌陀といふことがうなづかれる。

□

過去十年の孤峯頂上の悶え、其後數年の光明生活、斯んな二つを比較してそして今法悅の域にあつて安穩の生活をつゞけ得る幸福、其處には御聖恩の尊さを拜せずに居れぬ、路傍に朽ち行く草木さへ御聖恩の尊さに浴して欣々然として居るのが見える、世の新しい主義のもとに不平だ不滿だ、不備だ不調和だといつてる人達にたつた一度でもよいから孤峯頂上に立つて其處から躍り出して貰ひたい、其處には屹度私と一緒に聖壽無窮を祈らずには居られない。

城頭の蒼松に淡い雪が旭に照されて嬉々として光つてゐる、そしていづれとして春風が吹いて居ない里がない、尊い有り難い限りである。（大正一三、一、一八夜）

孤峰頂上に立ちて（終）

大道會朝暮勤行祈禱要法

先づ佛前に至りて合掌三禮

我此道場如帝珠　十方三寶影現中　我身影現諸佛前　頭面接足歸命禮

次に端座合掌して

先づ懺悔文　三遍

我昔所造諸惡業　皆由無始貪瞋痴　從身語意之所生　一切我今皆懺悔

次に三歸　三遍

弟子某甲　盡未來際　歸依佛　歸依法　歸依僧

次に三竟　三遍

弟子某甲　盡未來際　歸依佛竟　歸依法竟　歸依僧竟

次に十善戒　三遍

弟子某甲　盡未來際

不殺生　不偸盜　不邪婬　不妄語　不綺語　不惡口　不兩舌　不慳貪

不瞋恚　不邪見

次に般若心經　一卷又は數卷

佛說摩訶般若波羅密多心經

觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄

舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是

諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌

身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老

死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故

菩提薩埵依般若波羅密多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒

夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅密多是大神呪是大明呪是無上呪是無等々呪能除一切苦眞實

不虛故說般若波羅密多呪即說呪曰

揭諦揭諦　波羅揭諦　波羅僧揭諦　菩提娑婆賀

次に祖師寶號

次に廻向文

願くは此の功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成せん

ことを

新願文

願くは是の如くの懺悔受戒奉讀經典の功德を以て日月淸明神祇威を增し此

國君聖に臣賢に風雨時に順し諸人悉く十善戒を護持し緇素共に正法正義

に歸投し相似の法をして正しきに復せしめ諸の惡行邪習をして速に殄滅せ

しめ如來の正法を光顯にして彌勒の下生に至らんことを

又是の如くの功德を以て十方法界の衆生に廻向し未た苦を離れさるものには願くは苦を離れしめ未た樂を得さるものには願くは樂を得せしめ未た菩提心を起さゝるものには願くは菩提心を起さしめ未た惡を絕ち善を修せさるものには願くは惡を絕ち善を修せしめ未た成佛せさる者には願くは成佛せしめん

次に各自の心中の祈願を述ふへし

大正十三年六月二十五日印刷
大正十三年六月三十日發行

定價金壹圓五拾錢

著作者　勝平大喜
發行者　島根縣八束郡講武村　井川土之助
印刷者　島根縣簸川郡出東村大字坂田二七八　勝部本右衛門
印刷所　島根縣松江市殿町三八三　松陽新報社
發行所　島根縣八束郡講武村藥師院中　講武村大道會

504
283

落